

人それぞれに異なるものの見方・考え方がある

一つのものについても、見る角度によって見え方が違う。

世の中の出来事についても同じこと。

自分の見方や考え方だけが全てではない。

相手の立場や考え方を尊重しつつ

自分らしく行動するには

どのようにしたらよいだろうか。



● 自分と異なるものの見方や考え方と出会って印象に残っているのはどんなことですか。

人にはそれぞれの考え方があり、個性がある。

人間がある物事を見るとき、

初めからその全体を知り尽くすことは難しく、
自分なりの角度や視点から見ることになる。

このため、

人によって様々なものの見方や考え方が出てくる。

しかし、

誰もが自分の意見だけにこだわっていたのでは何も解決しない。

自分と同じように相手にもその立場からの意見があり、

その立場に立って物事を眺めれば、

きっと新たな発見がある。

互いの個性や立場を尊重し、

相手との違いを認め、謙虚に学ぶことで、

より良い解決方法が見つかる。

そして、自分自身の成長にもつながるだろう。



いろいろな人の ものの見方や考えから学ぶことで 自分がより大きくなる

自分とは違うからこそ、学ぶ価値がある。

多くの人と出会い、関わり合う中で
自分では気付かなかった周囲の人のものの見方や考え方に謙虚に学ぶことは、
人間としての成長に大きく役立つだろう。



●異なる意見を尊重しつつ、自分も成長していくにはどうすればよいか、考えてみよう。

他の人の立場や考えを 理解していない自分に 気付いた経験がありますか



あなたには
自分のことを他の人に分かってもらえずに
傷付いた経験はないだろうか。
他の人に理解されないときは
どんな気持ちだっただろう。
相手が理解してくれなかったのはなぜだろう。
反対に、自分が相手の考えを理解していなかったと
気付いたことはなかっただろうか。
人にはいろいろな事情があり、考え方も十人十色。
相手の考えや立場を尊重しながら
人間関係をつくっていくのは難しいことだけど、
それだけに互いに理解し合えたときには、
うれしい気持ちになる。

saying

この人のひと言

君子は和して同ぜず。
小人は同じて和せず。

孔子

■こうし (前 551～前 479)
古代中国の思想家。言行録『論語』。

互いの知識を持ち寄り、
互いに許し合わなければならない。

たった一人の者が見解を異にしたとしても
この者を大目に見なければならない。

ヴォルテール

■ヴォルテール (1694～1778)
フランスの啓蒙思想家。

一つの立場を選んではならぬ。
一つの思想を選んではならぬ。
選ばば、君はその視座からしか、
人生を眺められなくなる。

ジッド

■アンドレ・ジッド (1869～1951)
フランスの小説家。『狭き門』など。

● あなたの見付けた言葉、考えたこと。

column

人物探訪

勝海舟、義兄の高橋泥舟とともに「幕末の三舟」と言われた江戸城無血開城の功労者の一人、山岡鉄舟。

十五歳のときに自分を律するルールを作り「己の知らざることは何人にもならうべし」や「他を顧して自分の善ばかりするべからず」などを実践した。

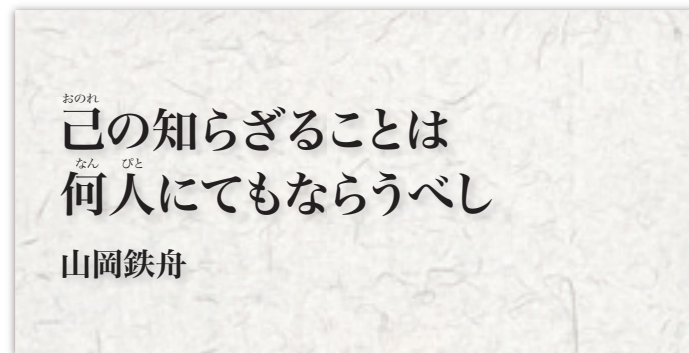
鉄舟は、剣の達人、禪を極めた人物としても知られるが、書の名人として、次のようなエピソードもある。

ある日、門人たちと夜祭りに出かけた鉄舟は露天商に「この書は、かの山岡鉄舟先生の書かれた本物ですぜ。」と声をかけられ、書をのぞき込んで「そうか、それでは頂こうか。」と買い求めた。「何で先生、こんな偽物を……。」という門人に「俺よりうまい。こいつを手本にするよ。」と言った。誰からも学ぼうという謙虚さに、門人たちは感銘を受けたという。

またあるとき、牛屋(牛肉を売る商売)が看板の字を書いて欲しいと鉄舟のところへやってきた。門人たちは、恐れ多くも先生に店の看板を書かせるとは何事かと激怒し牛屋をとがめていたところ、鉄舟は「構わんよ、俺が書いた字で商売が繁盛すりゃ結構だ。」と言って快く引き受けた、と勝海舟が彼の回顧録で語っている。

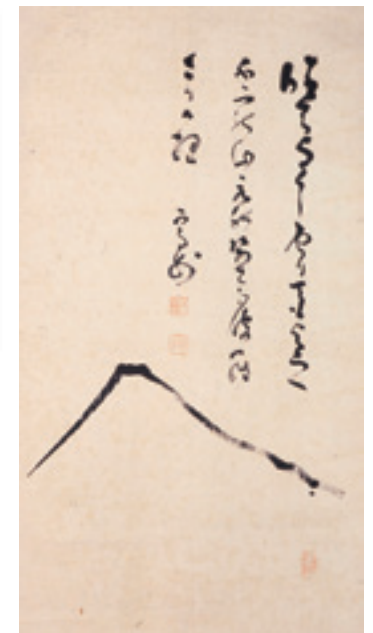
江戸城開城にあたって、鉄舟は幕臣として西郷隆盛との最初の交渉相手となった。その懸命の訴えが西郷と勝との会見につながり、江戸の町を戦火から救うことになる。

西郷には、そのときの印象が強烈だったらしい。「金もいらぬ、名誉もいらぬ、命もいらぬ人」と鉄舟のその人柄に大きな影響を受け、後年、自身の無欲は鉄舟の生き方に学んだと回顧し、「始末に悪いが、そのような人でなければ天下の偉業は成し遂げられない。」とも語っている。



山岡鉄舟

● 江戸生まれ。江戸幕府の幕臣。明治時代の政治家。幕末、江戸を目指して駿府まで来ていた西郷隆盛に、鉄舟一人で会いに行き、江戸城の無血開城の交渉を行った。● 明治維新後は徳川家とともに駿府に移るが、廃藩置県後には、新政府の下で権令などを務めたほか、西郷隆盛の依頼で、明治天皇の侍従を10年間務めた。● 幕末・維新の争乱で命を落とした人たちを弔うために東京谷中に全生庵を建立した。



山岡鉄舟の書
「晴てよし 曇りてもよし 不二の山 元の姿は かはらさりけり」

山岡鉄舟 (やまおかてっしゅう) 1836～1888

夜中に、はっと目が覚めた。すぐにベッドから起き出してリビングへ降り、パソコンの電源をつける。画面の光が部屋の片隅にまぶしく広がった。

私は、ヨーロッパのあるサッカーチームのファン。特にエースストライカーのA選手が大好き。ちょうど今頃、向こうでやっている決勝の試合が終わったはず。ドキドキしながら試合結果が分かるサイトをクリックした。

「やった、勝った。A選手、ゴール決めてる。」

思わず声が出てしまった。大声出したら家族が起きちゃう。そっと一人でガッツポーズ。

みんなもう知ってるかな。いつものように日本のファンサイトにアクセスした。画面には、「おめでとう」の文字があふれてる。みんな喜んでる。うれしくて胸が一杯になった。私もすぐに「おめでとう」と書き込んで続けた。

「A選手やったね。ずっと不調で心配だったよ。シュートシーンが見たい。」

すると、すぐに誰かが返事をくれた。

「それなら、観客席で撮影してくれた人のが見られるよ。ほら、ここに。」

15



「Aのインタビューが来てる。翻訳も付けてくれてる。感動するよ。」

画面が言葉で埋め尽くされていく。私は夢中で教えてくれたサイトを次々に見に行った。

学校でもサッカーの話をするけど、ヨーロッパサッカーのファンは男子が多い。私がA選手をカッコいいよね、って言っても女子同士ではあんまり盛り上がらない。寂しかったけど、今は違う。ネットにアクセスすれば、ファン仲間が一杯。もちろん顔も知らない人たちだけど。今この瞬間、遠くの誰かが私と同じ感動を味わってる。なんか不思議、そしてうれしい。気が付くともうすぐ朝。続きはまた今夜にしよう。

5

今日は部活の後のミーティングが長かった。家へ帰ると、食事を用意して待っていた母に、「ちょっと待ってて。」

10

と言って、パソコンに向かった。優勝後のインタビューとか、もっと詳しく読めるかな。楽しみ。

「Aは最低の選手。あのゴール前はファールだよ、ずるいやつ。」

開いた画面から飛び込んできた言葉に、胸がどきっとした。何、これ。

「人気があるから優遇されてるんだろ。大して才能ないのにスター気取りだからな。」

ひどい言葉が続いている。読み進むうちに顔が火照ってくるのが分かった。

15

怒りで一杯になって夢中でキーボードに向かった。ファンサイトに悪口を書くなんて。

「負け惜しみなんて最低。悔しかったら、そっちもゴール決めたら。」

すると、また次々に反応があった。

「向こうの新聞にも、Aのプレイが荒いって、批判が出てる。お前、英語読めないだろ。」

「Aのファンなんて、サッカー知らないやつばかり。ゴールシーンしか見てないんだな。」

20

「Aは、わがまま振りがチームメイトからも嫌われてるんだよ。」

必死で反論する私の言葉も、段々エスカレートしていく。でも絶対負けられない。

「加奈子、いい加減にきなさい。食事はどうするの。」

母の怒った声。はっと気付いて時計を見た。もう一時間もたってる。

「加奈ちゃん、パソコンは時間を決めてやる約束よ。」

ずっと待たされていた母は不機嫌そうだった。

「ごめんごめん。ちよっと調べてたらつい長くなっちゃって。」

「そうなの。なんだかこわい顔してたわよ。加奈ちゃん、こっちに顔を向けて話しなさい。」

「はあい、分かりました。ちゃんと時間守ります。お母さんの御飯おいしいよね。」

そう言いながらも、私の頭はA選手へのあのひどいコメントのことで一杯だった。

「まったく調子いいんだから。でもね、ほんとかどうか目を見れば分かるのよ。」

私は思わず顔を上げて母を見つめた。その表情がおかしかったのか、母がぶつと吹き出した。つられて私も笑った。急におなががすいてきちゃった。

食事の後、サイトがどうなっているか気になって、恐る恐るパソコンを開いてみた。

「ここにA選手の悪口を書く人もマナー違反だけど、いちいち反応して、ひどい言葉を向けてる人、ファンとして恥ずかしいです。中傷を無視できない人はここに来ないで。」

ええーっ。なんで私が非難されるの。A選手を必死でかばってるのに。

「A選手の悪口を書かれて黙っているって言うんですか。こんなこと書かれたら、見た人がA選手のことを誤解してしまうよ。」

「あなたのひどい言葉も見られています。読んだ人は、A選手のファンはそういう感情的な人たちだっ
て思っちゃいますよ。中傷する人たちと同じレベルで争わないで。」

なんで私が責められるのか全然分からない。キーボードを打つ手が震えた。

「だって悪いのは悪口書いてくる人でしょ。ほっとけって言ってますか。」

「挑発に乗っちゃ駄目。一緒に中傷し合ったらきりがないよ。」

優勝を喜び合った仲間なのに。遠くのみんなとつながってるって、今朝はあんなに実感できたのに。何だか突然真つ暗な世界に一人突き落とされたみたいだ。

もう見たくない。これで最後。と、もう一度画面を更新した。

「まあみんな、そんなきつい言い方するなよ。ネットのコミュニケーションって難しいよな。自分もどうしたらいいかわかって、悩むことよくある。失敗したなーってときも。」

「匿名だからこそ、あなたが書いた言葉の向こうにいる人々の顔を思い浮かべてみて。」

えっ、顔。思わず私はもう一度読み直した。そして画面から目を離すと椅子の背にもたれて考えた。

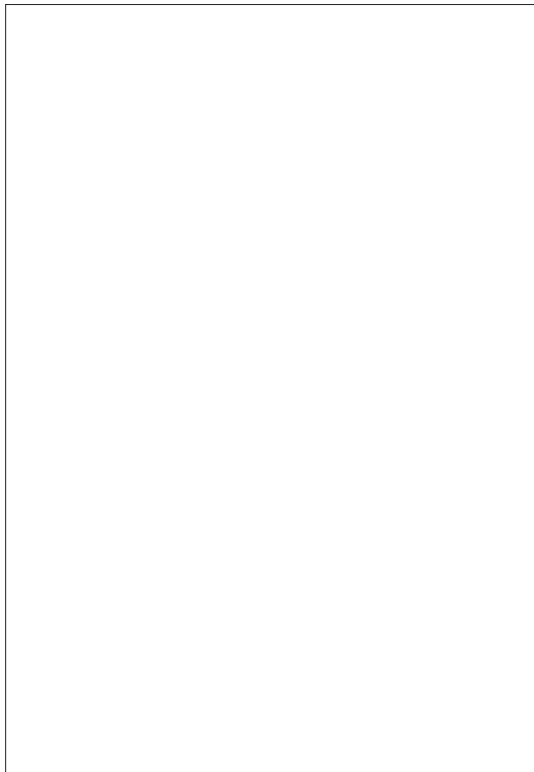
そうだ……。駄目だなあ。何で字面だけにとらわれていたんだらう。一番大事なことを忘れていた。コミュニケーションションしているつもりだったけど。

私は立ち上がり、リビングの窓を大きく開け、思いっきり外の空気を吸った。

「加奈ちゃん。調べ物はもう終わったの。」
台所から母の声がする。

「調べ物じゃないの。すごいこと発見しちゃった。」
私は、明るい声で母に言った。

● 感じたこと、考えたこと。



相手の善意や支えに気付くこと

思い浮かべてみよう。
自分の生活が、
どんな人たちに支えられているか。
自分が
誰をどんなふうに
支えることができているか。



●なぜ人は自分を支えてくれるのか、考えてみよう。

●なぜ感謝の気持ちをうまく表現できないことがあるのか、考えてみよう。

私たちは、助け合い、協力し合って生きている。
この世の中を支え、円滑に動かしているのは、
「感謝の心」ではないだろうか。
感謝の心を表し、互いに届け合うことで
温かく、潤いのある人間関係が築かれる。
身近なところで自分を支えてくれる人、
社会の中でお世話になっている人、
さらには
私たちを育んでくれる自然の恵み、
様々な人や環境への感謝の気持ち
素直に表し、伝えたい。
そして、自分も誰かを支える存在になっていきたい。

あ り が と



(6) 人々の善意や支えに応えたい

「ありがとう」の思いを込めて

- 伝えられてうれしかった「ありがとう」を書いてみよう。



- 伝えたい「ありがとう」について考えてみよう。

いっばい言っとけばよかった

ありがとう。
ありがとう。
ありがとう。
ありがとう。
ありがとう。
ありがとう。
まだ足りない、百回、いや千回、
もっともっと、でもまだ足りない。
お父さんが生きていた間にいっばい言っとけばよかった。

(十七歳・女子)

「ありがとう」
伝えたいけど何だか照れくさい。
「ありがとう」
口にすれば何だか恩着せがましい。
「ありがとう」
その言葉だけでは伝えられないものがある。

そう思っているあなた。
伝えられなかった「ありがとう」が迷子になっていませんか。

saying

この人のひと言

おかげさまは、
人間でなくては十分に体験せられぬのである。

鈴木大拙

■すずき だいせつ (1870~1966)
仏教学者。『日本的靈性』『禅と日本文化』など。

感謝を言葉や態度で表すことを後延ばしにすることのないように
自分を訓練しなさい。

シュヴァイツァー

■アルベルト・シュヴァイツァー (1875~1965)
アルザス地方(当時はドイツ、現在はフランス)出身の哲学者、医師。

感謝の念を表すときの最も崇高な方法は
ただ言葉にするのではなく、
行動で表すことだということを忘れてはいけない。

ケネディ

■ジョン・F・ケネディ (1917~1963)
第35代アメリカ合衆国大統領。

●あなたの見つけた言葉、考えたこと。

message

メッセージ

平成二十五(二〇一三)年一月、初場所前、私は「幕下に落ちたら引退する」と公言し自分を奮い立たせました。この場所、東十両十二枚目。負け越せば幕下陥落です。
しかし十三日目で四勝九敗、新聞には「高見盛引退へ」という記事が載りました。その日の夜、年末に胸椎の大手術をして入院中の師匠東関親方は、引退を心配する後援会の方に「いや、サカリがまだやると言うかもしれないませんか。」と、答えてくれたそうです。世間が私の引退を決め付けている中、私の意志を大事にしてくれたのでした。入院先から毎日、激励のメールを送ってくれました。
私は子供の頃から体は大きかったのですが、気が弱く、不器用で、よく同級生にからかわれました。弱虫というか、いじめられてたわけですね。
小学校四年生のとき、見かねた担任の先生が、自信をつけさせようと私を相撲部に入れました。中学横綱になり、相撲の強い高校に入学しましたが、そ

こでも不器用で周囲に迷惑のかげつばなし。しかし、監督や先輩が助けてくれました。大学の相撲部でも、同じでした。
その間、つらくて相撲を辞めようと思ったことが二度あります。そのとき「辞めるのはいつでもできるから、もう一日頑張ってみれ。」と母が言ってくれました。その言葉がなかったら、青森に戻っていたでしょうね。
千秋楽、私は引退を決心しました。
緊張から解放されほっとしたとき、私はこれまでいろいろな人に支えられて今日を迎えたことに、改めて気づきました。相撲でもう一日頑張れと背中を押してくれた母、病床の親方、先輩や先生、そして力士の仲間たち。不器用な自分を支えてくれたたくさんの人たちの顔が、支度部屋で浮かんできたのです。不器用な性格は直りませんが、これからは、これまでの恩返しをしながら、いろいろな善意や支えに気づき、感謝の気持ちをしっかりと伝えられるよう心掛けていきたいと思っています。



不器用な自分を支えてくれた
全ての人に感謝したい。
振分精彦(元小結高見盛)

●青森県出身。日本相撲協会年寄。元大相撲力士高見盛。小学校4年生から相撲を始め、中学横綱、高校では国体少年の部優勝、大学4年のときアマチュア横綱。●平成11(1999)年春場所幕下付出で初土俵。平成12(2000)年初場所新十両、名古屋場所で新入幕。最高位小結。平成25(2013)年初場所後引退、年寄振分を襲名した。



振分精彦(ふりわけせいけん) 1976~

現役時代の振分親方(高見盛)

私は故郷のK町に向かった。一人暮らしの母が脳卒中で倒れ、町の病院に運ばれたと連絡が入ったからだ。

F駅で新幹線を降り、小雪のちらつく在来線ホームでなかなか来ない電車を待っていた。家路を急ぐ人たちの中で、自分の周りだけ空気が止まっているように感じた。

やっとホームに入ってきた電車に乗り込むと、一番隅の座席に身を沈めた。

動き始めた電車の揺れを体に感じながら、目を閉じていると、朝からのことが思い出された。撮影現場に出掛けようとしたとき、電話が入った。詳しいことは分からなかったが、とりあえず監督にだけ事情を話して急いで東京を出てきた。

私はK町で生まれた。父は、私が幼い頃に亡くなり、母は女手一つで私を育てた。高校を卒業すると、俳優を目指して一人上京した。幸い劇団の研修生になることができた。演技の練習の合間には、食べるために夜昼となくアルバイトをして金を稼いだ。ようやく端役ではあるが、仕事をもらえるようになり、少しずつ映画やテレビにも出演するようになった頃には、三十も半ばを過ぎていた。今では、一人暮らしなら何とか食べられるようになっていく。

上京
東京へ行くこと。

そういえば、母の所へ帰ったのはいつだっただろう。母の声を聞いたのはいつだったのか。思い出せない。母は、いくつになっただろう……。

「……七十歳になるのか。」

窓の外は暗い。小さな明かりだけがちらちらと点滅して去って行く。

「命に別状はないだろうか。」

私はコートのポケットに入れた手を強く握り締めた。

ふと気が付くと、車両には数人しか乗っていない。

K駅の階段を駆け下り、雪が一段と激しく舞う中を、タクシー乗り場に急いだ。開いたドアに身を滑り込ませると、ドアがまだ閉まり切らないうちに、

「町立病院に急いでください。」

と、告げた。

私のただならぬ様子を察したのか、運転手は返事をしてちらっと私を見た。

病院に近付くと、運転手は、

「正面は閉まっていますから、夜間入口に回しましょう。」

と言う。礼を言ってタクシーから降りると、受付で、名前を告げて病室を聞いた。

エレベーターを降りた私は、病室の前で少しためらって、ドアに手を掛けた。

私の目に飛び込んできたのは、ベッドに横たわる母の姿だった。ベッドの向こうに座っていた老夫婦が同時に立ち上がった。

「母は……、どうですか。」

「大丈夫。命に別状はないですよ。」

ひそやかな声でおばさんは答えた。

「今はもう、落ち着いて眠っている。」

おじさんは、私の顔を見つめて言った。

私は大きく息を吐いた。



「ありがとうございます。」

私はただ、頭を下げ続けた。

「研ちゃん、かばんを置いて、お座りよ。疲れただろう。」

おばさんは、そう言って、自分の座っていた椅子を持ってきた。

「おじさん、おばさん。何かから何までお世話になって本当にありがとうございます。お二人こそお疲れでしょう。今夜は僕がいますから、もう、おうちで休んでください。」

老夫婦をエレベーターまで見送り、病室に戻ろうとして、廊下の明かりが落としてあるのに気が付いた。腕時計を見ると十時を回っている。

病室に戻って改めて母の顔を見る。母の顔に苦痛はなく、寝息は穏やかだ。

10

翌朝、夜のうちに降った雪が一面に白い世界をつくり、朝日にきらきらと輝いていた。

私がまどろみから目を覚ますと、母が見つめていた。

「研一。心配かけたね。」

気丈な母の声とは思えぬ弱々しい声だった。

「何言ってるんだ。」

私が、立ち上がろうとしたとき、老夫婦が入ってきた。

「研ちゃん、朝御飯、まだだろう。」

と言って、岡持ちから皿を出した。

「朝御飯らしくないけど、チャーハンだよ。子供の頃好きだったよね。」

老夫婦は、私たち親子が住み込みで働かせてもらっていた中華料理店を経営していた。

20

おじさんは自分たちのまかないを作るときは、私の食事も必ず作ってくれた。おじさんに、

15



岡持ち
料理を出前する際に用いる箱のこと。

まかない
従業員用の料理。

押し頂く
高くさげ、礼儀正しく丁寧な物を受け取る。

「研ちゃん、今日のまかない何にしようか。」

と尋ねられると、いつも、

「チャーハン。」

と、答えたものだった。

老夫婦はすでに店をたたんで年金生活を送っている。母がその店を借りて小さな居酒屋を開いたと

5

きも何かと力になってくれたと母は手紙で知らせてきた。その老夫婦が、私の好きであったチャーハンを朝から作って持ってきてくれた。私は、おじさんが差し出したチャーハンの皿を押し頂くように受け取った。私の胸に熱いものが流れるのを感じた。

「研一。昨日の晩、寝てないんだろう。家に帰って眠っておいで。」

母に促された。眠る気はなかったが、身の回りのものを少し持ってこようと、老夫婦と一緒に

10

て親子で住んだ所に向かった。

「研ちゃん。佐知子さんのことだけど、軽い後遺症が残るかもしれないとお医者さんが言っていたけど。」

「そうですか。リハビリが必要になるんですね。」

店には、おじさんの字で、

15

「都合によりしばらくの間休業します。」

という張り紙がしてあった。母の店は、母のおいしい手料理と優しい人柄で町の人が集まっていたらしい。

母の部屋で入院生活に必要なものをまとめてみると、引き出しの中に小さな包みがあった。私名義の通帳だった。見ると私が母に送金したものがそのまま貯金されていた。また、私の芸能活動のスクラップ帳も出てきた。何度も何度もページをめくったのだろう。端がすっかりめくれてしまっている。

20

しかし、先ほど通ってきた一階の店の方には、私の写真は、一枚もなかったように思う。

病院に戻ると、さっそく見舞い客があった。町の人で店の常連さんたちだという。私が入っていくと、「えっ、研一さんって。俳優の……。」

「おばさん、何にも言わないんだよ。何でだよ。」

母は黙っている。それで私には、店に写真が一切ないことの原因が分かった。母は、きっと私の俳優としてのイメージを壊さないようにと思ったのだろう。私はそんな母のことを気に掛けもせず、遠く離れた都会で一人でのうのうと暮らしてきた。

見舞い客の帰った後、私は母に言った。

「母さん、東京で一緒に暮らそう。」

母は、首を振った。

「だって、しばらくリハビリも必要なだろう。もう遠慮しないでいいんだよ。」

「この町がいいんだよ。」

母が、ぼつりと言った。

その言葉を聞いた老夫婦は顔を見合わせた。

「研ちゃん。私たちはまだ元気だから、私たちができれば、佐知子さんのリハビリや身の回りのことは手伝うけど……。」

おばさんは、遠慮がちに申し出た。

私は驚いた。確かに長年世話にはなっただけけれど、病気になった母をお願いしますとは言えるはずがなかった。

「研ちゃん、私らだけじゃないんだよ。さっき見舞いに来た連中だって、ちよくちよくのぞくって、言ってるんだよ。」

嫌がる母を東京に連れ帰ることは難しい。しかし、母のことは私が面倒を見なくてはいけないと思っている。母は、この町でどんな人たちとつながっているのだろう。大人になってこの町で暮らしていない私には分からない。甘えさせてもらってもいいのだろうか。

頭を上げると二人が私をじっと見つめている。その目は優しくかった。

「ありがとうございます。母とゆっくり話し合ってみます。」

私は、ただこの言葉しかなかった。

ドラマの撮影のため、とりあえず一度東京に戻らなくてはならず、翌日は駅に向かった。

「研一。」

と声を掛けられて振り向くと、中学校の同級生の雅也であつた。

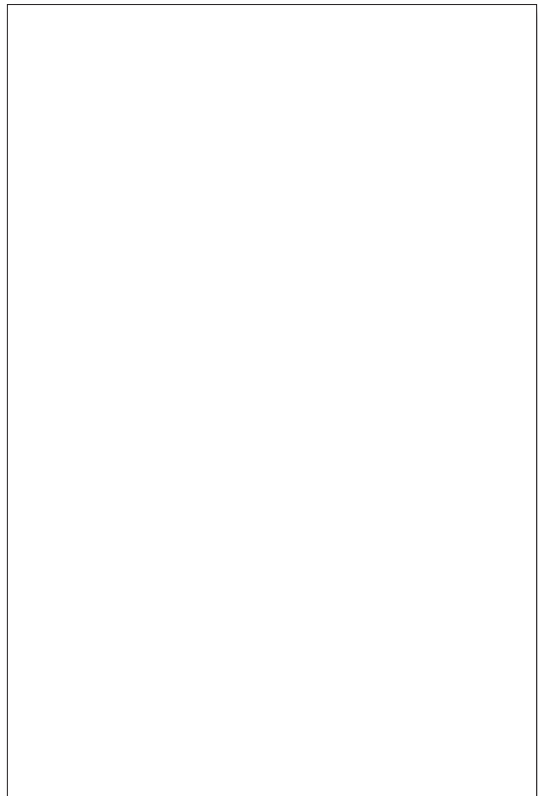
「お母さん、悪いんだってな。大丈夫か。」

思いがけないことだった。雅也とは、特別仲が良かったわけではない。それでも病状を尋ねてくれる。そんなぬくもりがこの町にあつたのか。

来た道を引き返す電車に乗った。私は優しさに包まれていた。

窓から見える山々は雪を残しているが、柔らかな光が当たっている。

● 感じたこと、考えたこと。



支え合い共に生きる

知命

茨木のり子

他のひとがやってきて

この小包の紐 どうしたら

ほどけるのかしらと言う

他のひとがやってきては

こんがらかった糸の束

なんとかかしてよ と言う

鋏で切れいと進言するが

肯じない

仕方なく手伝う もそもそと

生きてるよしみに

こういうのが生きてるってことの

おおよそか それにしてもあんまりな

まきこまれ

ふりまわされ

くたびれはてて

ある日 卒然と悟らされる

もしかしたら たぶんそう

沢山のやさしい手が添えられたのだ

一人で処理してきたと思っている

わたくしの幾つかの結節点にも

今日までそれと気づかせぬほどのさりげなさを

私たちは今まで、多くの人たちと出会い、共に生きてきた。これからの人生で、もっともっと多くの人たちとの出会いがあることだろう。

今、自分の周りにいる人たちとの関わり方について改めて考えてみよう。